

蝶々夫人ゆかりの地を訪ねて  
**長崎2・3日間**

2004年2月1日(日)～4月25日(日)出発

**27,500円～35,000円**  
(2日コース・おひとり様)

日程	スケジュール
1 1	羽田空港 ANA 長崎空港 → (各自負担) ホテル 到着後フリータイム
1 2	終日フリータイム
2 3	出発までフリータイム ホテル(各自負担) → 長崎空港 ANA 羽田空港

●宿泊・食事条件/長崎全日空ホテルグラバービル(2日:1泊1朝食 3日:2泊2朝食) ●利用便/羽田ー長崎線 全便利用可  
●最小催行人員/2名 ●添乗員/同行いたします  
●旅行代金に含まれるもの  
①個人包括旅行割引運賃適用の往復航空運賃 ②規定の宿泊費・食事代 ※規定以外の食事代・交通費・入場料はお客様負担となります  
※「長崎&ハウステンボス3日」もございます。詳しくはお問合せください。

お申し込みは出発の10日前までとなります。詳しい旅行条件を説明した書面をご用意していますので、事前にご確認の上お申し込みください。

お問い合わせ・お申し込みは  
東京 ☎03-6251-8733  
平日9:00～19:00(但し、土・日・祝日は9:00～18:00まで)

主催 **ANAセールス&ツアーズ株式会社**

国土交通大臣登録旅行業第1656号(社)日本旅行業協会正会員 © 105-7134 東京都港区東新橋1丁目5番2号 汐留シティセンター

「蝶々夫人」の面影をさがして……

長崎は異国情緒あふれる街です

この街から「蝶々夫人」は生まれました

石畳の坂道をのぼって海の見える高台へ

早春の風にふかれて長崎ぶらり旅

「蝶々夫人」100周年

ブッチーがミソのスカラ座で「蝶々夫人」を初演したのが1904年2月17日でした。明治中期の日本の一面を描いた「蝶々夫人」は、当時の日本を世界の人々に知ってもらったために、どんな外交政策よりも役立ちました、と言われています。それに加え、私はより正しく「日本」を知ってもらうため、今回、忠実にブッチーの「日本の音」を再現しました。この「音」の記憶が残っているうちに長崎を訪れ、ぜひ「蝶々夫人」の舞台を実感してみてください。



内藤 彰 (東京ニューシティ管弦楽団音楽監督)

ブッチーニ作曲《初演百周年記念～正しい楽器考証に基づく世界初演～》

歌劇 **蝶々夫人**

(コンサートオペラ形式) 原語上演日本語字幕スーパー付



**MADAMA BUTTERFLY**

2004年1月16日(金) 18:30開演 (開場17:30)

◆18:00～指揮者による創作楽器の紹介とプレトーク

東京芸術劇場大ホール  
TOKYO METROPOLITAN ART SPACE

主催:東京ニューシティ管弦楽団  
助成:Asahi アサヒビール芸術文化財団  
協賛:ビュッフェ・クラボン株式会社  
ANAセールス&ツアーズ株式会社  
ネスレ ジャパングループ  
協力:株式会社プロフェッショナル・パークッション  
株式会社 及春鋳造所



「社」企業メセナ協議会認定





オペラ歌手・「NPOみんなのオペラ」芸術総監督  
岡村 喬生 Takao Okamura

## 世界初の試みに拍手

昨年7月に僕は東京ニューシティ管弦楽団と「蝶々さん」を演出し上演した。世界で初めて原作の日本誤認を訂正したのだが、内藤彰さん、指揮の飯守泰次郎さんと3人で改訂について公開セミナーをやった時に得たアドバイスで新楽器も使わせて頂いた。でも、僧侶登場の時の銅鑼の音が実は、寺の鐘であるというアイデアと、スズキがお祈りの時に鳴らすラの音に調律された鈴を使うことのみにとどまった。

プッチーニの「マダム バタフライ」は、何千人もの外交官に値するほど日本を世界に紹介し続けてくれた名作である。だが我々日本人から見ると日本誤認の多いオペラで、僕は歯ぎしりのし続けであった。

もしこれが白人圏の国を舞台としたオペラならすぐに改められたであろう。だから日本人として僕は憤慨するのである。

内藤さんは楽器のこれまでの過ちを直し、大金をかけて新しい日本のオリジナル楽器を揃えられた。これは日本人でなければ気がつかず、鯪<sup>しやっちょよこた</sup>才立ちしたって西洋人には出来ないことだ!

どんな音がして、どんな効果があがるのか、わくわくして僕は客席に座る。

原作の日本誤認はこれだけではなくまだまだある。傑作を損なわないように気をつけて、10月末に僕はこのオーケストラと又一緒に改訂版「蝶々さん」を、昨年のを改善して再演するが、楽器では先に改訂されてしまったのが悔しい。



TOKYO NEW CITY  
ORCHESTRA

プッチーニ

## 歌劇「蝶々夫人」(全2幕) Giacomo Puccini : Madama Butterfly

原作:ジョン・ルーサー・ロング/ダヴィッド・ペラスコ

台本:ルイジ・イッリカ/ジュゼッペ・ジャコーザ

指揮:内藤 彰

演出:栗山 昌良

キャスト

- 蝶々夫人: 松本 美和子
- ピンカートン: 小林 一男
- シャープレス: 勝部 太
- スズキ: 郡 愛子
- ゴロー: 松永 国和
- 僧侶: 菅野 宏昭
- ヤマドリ: 宮本 哲朗
- 神官: 安藤 常光
- ケイト: 渡邊 史
- 子ども: 畠山 紫音

合唱: 東京合唱協会

<ソプラノ>

青木 雪子(蝶々さんの従妹)・金山 明子・滋田 聖美・鈴木 恵美子  
鈴木 ゆう子・鈴木 由美子・竹内 宏佳・長倉 真希

<アルト>

石田 幸子・小林 裕美(蝶々さんの叔母)・鈴木 マチ子(蝶々さんの母)  
鈴木 光子・廣瀬 緑・宮村 香賀子

<テノール>

川島 尚幸・久保田 享・佐々木 紀夫・嘉松 芳樹

<バス>

東 浩市(ヤクヒデ)・大元 和憲(役人)

管弦楽: 東京ニューシティ管弦楽団

スタッフ

演出助手: 飯塚 レオ / 副指揮: 小屋敷 真 / 衣裳: 岸井 克己

照明: 室伏 生大 / 装置: 鈴木 敏郎 / 舞台監督: 小栗 哲家

字幕: 増田 恵子 / 練習ピアノ: 松本 康子、村田 千晶 / 制作: 下瀬 のり吉

衣裳: 東京衣裳 / 照明: あかり組 / かつら: 丸善かつら / メイク: イマージュ

大道具: 東宝舞台 / 小道具: クリエーション / 字幕: 朝日解説事業



# プッチーニの夢の音色を世界で初めて実現します!

内藤 彰

明治時代の半ばごろ戯曲「蝶々夫人」を見たイタリアの作曲家プッチーニは、これをオペラにしたいという強い衝動に駆られ、発明されたばかりのレコードを利用し、沢山の日本の旋律や、日本にしかない色々な音色をふんだんに取り入れた、日本情緒豊かなこのオペラを作曲しました。日本に来たことのない彼にとって、日本の寺の釣鐘の音や鉦(キン:寺で僧侶が経を読みながら叩く大きなお椀形の金属)、鈴(リン:家庭にある仏壇に備えられたチーンと鳴らす小さいお椀形の金属)、風鈴等は、初めて聞くとても印象深いかねの音で、彼はこれらの音に、全曲を通じて大きな役割を与えています。彼はそれらの音を大変気に入る、その名前すら分からないまま、**‘大きな日本の鐘’‘小さな日本の鉦’**等といった彼なりの**楽器名**をつけて何とかそれらの音色を曲中で効果的に再現させようとした。しかし日本に関する知識の無い外国人の指揮者やオーケストラにとっては、それらがいったいどのような**楽器**なのか、どのような音色を出せばよいのか理解するすべもなく、残念ながらまるで的外れな楽器が使用されたまま、プッチーニのせつかくの思いは今まで**一度も実現されたことなく**百年の月日が流れました。しかも本来音程など無いこれらの**かねの音**に、有り余る才能のいたずらか十二音の音程まで与え楽器として扱ってしまったがために、(現実にその様な楽器などありえなかったため)日本国内における公演ですら、彼の思いを実現させることを不可能にしてしまいました。しかし百年経った今、その**眠りを覚ますべく東京ニューシティ管弦楽団は4種類のかねを創り初演百年目**でついに**プッチーニの夢を世界で初めて実現させました!**

## 日本の寺の釣鐘の音 TamTam Grave を創りました!

**寺の釣鐘から中国の銅鑼の音が!?** 蝶々さんが、結婚式を前にして愛する夫ピンカー頓の信ずるキリスト教に改宗した事で

激怒した叔父の僧侶が、結婚式の最中に袈裟をまとって彼女をなじりに来る場面で、プッチーニは、**僧侶の怒鳴り声**「蝶々さん!」に呼応して**仏教を象徴する寺の釣鐘の音**を鳴らし、キリスト教に対抗する山場を設定しています。(根拠は注1 楽譜①参照)しかし外国の劇場ではその宗教上の意味が

楽譜①

理解できないためでしょう、何と‘蝶々夫人’と何の関係も無い中国を象徴するあのジャンと鳴る銅鑼(TamTam)を代わりに響かせてしまい、それによる場の盛り上がりが満喫されているのです。袈裟をまとった日本の僧侶と寺の鐘の組み合わせのところで、代表的な**中国の音**が大きく鳴り響いてしまっは、その場はもちろんぶち壊しになり、せつかくのプッチーニの意図も台無しです。もしヨーロッパの劇場で、教会の音が背景から聞こえてくる代わりに、中国

の銅鑼の音がジャンと鳴り響いてきたならば、すぐその場で大ブーイングのため公演は中断され、評論家の酷評と共に音楽監督の首がとぶほどの大問題に発展するかも知れません。このたび特注しました‘**寺の釣鐘の音**’を使うことにより、**初演百年にしてこの問題が世界で初めて解決されるでしょう。**

この件に関しては、もう一箇所同じような問題を抱えています。それは、オペラの最後の部分で蝶々さんがピンカー頓に裏切られて自殺をする衝撃のタイミングで鳴る**釣鐘の音**についてです。今まで慣習的に、直前の、悲劇を暗示する急激な音楽の盛り上がりの頂点で、唯一の独奏楽器として**中国の銅鑼(TamTam)**が効果音としてオーケストラピットの中から鳴り響いてきました。音楽はドラマチックに盛り上がり、一見プッチーニの思惑どおりでお客様も涙...というシーンですが、本当に彼は日本の悲劇の頂点で無関係な**中国の音**を使ってその場を盛り上げたかったのでしょうか? 残念ながらそうではありません。本当は、夫に裏切られた結果仏教信仰に戻り、仏壇に手を合わせてから自らの命を絶つ(ト書きの指示)蝶々さんへの同情と、ピンカー頓への怒りの表現のために、日本を象徴する**寺の釣鐘の強音(ff)**を独奏楽器として**舞台の背景から**鳴り響かせ、悲劇の頂点を締めくくらせようとしたのです。その方が、ドラマとしてははるかにつじつまが合うばかりか、総譜からもその意図がはっきり読み取れるのです。

(根拠は注2 楽譜②参照)このようにプッチーニの意図とは異なる誤った百年間の演奏習慣に従うか否かにより、この**山場の印象は、全く異なったもの**になってしまうのです。

楽譜②

楽譜③

この鉦は、世の中に音程を持った楽器としては存在していなかったため、世界中で初演以来百年間やむなく無視(このパートは演奏されない)され続けておりました。これらが使われていない今までの演奏では、この重要な意図は表現できず、誰からも気づかれること無く見過ごされてきたのです。今回この楽器が**世界で初めて特注**され使用されることにより、一幕の各所で、当時の日本情緒を大いに醸し出すことに役立ち、二幕では前述のように仏教的雰囲気がかつる楽器として、**大切な役割**を与えられています。

一幕終曲のピンカー頓と蝶々さんの素晴らしい愛の二重唱では、歌を含め、全ての楽器が弱音(pp)で書かれているにもかかわらず、この鐘(寺の鉦)だけがあえて強音(f)で書かれているところがあります。(楽譜⑤参照)このことが

## 十二音に調律された 仏教を代表する鐘 ‘鉦’(キン) (写真) TamTam Giapponesi を創りました!

二幕二場冒頭の間奏部分では、長崎港に帰って来たであろう夫ピンカー頓が自分のもに戻って来ることを期待と不安が入り混じった気持ちで待っている、けなげな蝶々さんの心理描写が描かれています。ここでは**教会の鐘(チャイム)**と、日本の**寺の鉦(音程付き)**とが初めて同じメロディーを仲良く一緒に奏するというアイデアによって、一幕で彼女を悩ませていたキリスト教と仏教との対立が時の経過につれ彼女の心の中で次第に解消されてきたことが、暗示されています。(根拠は注3 楽譜④参照)



楽譜④

楽譜⑤

示すように、曲中とても重要で目立つ役割を持たされており、この有無で曲の雰囲気に大きな違いが生ずることは自明のことです。しかし前述のように、その大切な音はここでもやむなく世界中の多くの劇場から無視されてきました。これに対し近年、苦肉の策として、無数に製造されている**タイの銅鑼**の中から比較的音程の正確そうな十二音を選んでこれに代用することが一部で慣習化されつつあります。しかし当然のことながら、これからは日本の音色というよりも、東南アジアや中国の色合いの方が強く感じられ(Gong Cinesiの代用として歌劇「トゥーランドット」でも中国の雰囲気を出すために使われることがあります)、プッチーニがもともとこれらを**日本的雰囲気や、日本の仏教的色合い**を醸し出すために使っていることを考慮すると、その目的が達せられない以上残念ながらふさわしい代用楽器とは言えません。今回特注した**日本の音;十二音に調律された寺の鉦**により、初演百年目で初めて**彼の望んだ日本の音色**が実現したのです。



4種類の音程に  
調律された4個の風鈴  
Campanelli Giapponesi  
(小さな日本の鐘)  
を創りました!

一幕の初め、ゴローが障子を開けたり閉めたりしながらピンカートンに家の隅々の説明をします。その後縁側には結婚式のために親戚の人たちが大勢集まって来て、いよいよ始まるというそんな時に、開け放された家の中から聞こえてくるかわいらしいチリリンリンと鳴る‘小さな日本の鐘’といえば、日本人ならすぐに‘風鈴’がイメージされるでしょう。(根拠は注4 楽譜⑥参照)それを理解できなかった当時の世界的巨匠が、訳

楽譜⑥

が分からず苦し紛れにピブラフォンで魅惑的な西洋の音を奏でてしまっ以来、同様に困っていた世界中の劇場が右に倣えとなり、今も世界中で奇妙な日本が鳴り響いています。日本でも鉄琴等さまざまな代用楽器で演奏されてきましたが、今回初めて待望の本物がお目見えします。一オクターブ離れた二組の風鈴(ドとミ)のかわいらしいハーモニーをご期待ください。



A音(ラ)に調律された、  
仏壇の中にあるチーンと  
鳴らす小さな鐘;  
鈴(リン) Campanella  
を創りました!

二幕の冒頭部分で、お手伝いのスズキが蝶々さんのために仏壇の前でお祈りをしながら、その中の鈴(リン)を鳴らす場面が出てきます。日本人なら誰でも知っている習慣ですが、仏教の事にうとい海外の劇場では、日本式のお祈りも鈴(リン)のこともほとんど分からないまま、仏教とは無縁な幾種かの鐘の音を鳴らしてきました。極めつけは、ある有名指揮者が祈りの時の鐘だからか、教会の鐘用のチャイムを使っていたことです。仏壇から教会の鐘が!?これがとても滑稽な間違いであることを世界の人たちに気付いてもらうためには、本物の鈴(リン)の音を他の楽器同様日本から世界の劇場に向けて発信していかなければなりません。今まではブッチーニが、決まった音程が無いはずの鈴(リン)に間違っってA音(ラ)を指定(楽譜⑦参照)したため、日本国内ですら入手が難しく、彼の理想はほとんど実現されずにきましたが、この度私共は

この壁を乗り越えるべく、A音(ラ)に調律された鈴(リン)を調達し、普及に向け歩み始めました。

以上、ブッチーニが、日本の音色に対して大きなこだわりを持ったがため生じた問題点と、その解決策を述べてきました。しかしブッチーニの日本に対するこだわりは、これだけではありません。彼は、固有名詞(主に名前)を中心に、随所に日本語をそのまま使おうとしました。しかし残念ながら当時の在伊日本人の協力にもかかわらず、多くの誤りが見受けられます。



●Izagi, Izanami...いざなぎ, いざなみ(のみこと); 単純なミスとして‘な’を付け足しIzanagilに直します。●Kami Saru(n) dasiko...猿田彦の(大御)神; ブッチーニは、東京から赴任していた大山公使夫人から江戸弁(‘ひ’が言えず‘し’になってしまう)で指導を受けたためなまったsiを使っていました。場所は長崎ですから当然hiに直さなければなりません。同様にキャストの1人“ヤクシデ”は“ヤクヒデ”が正しいでしょう。●Gli Ottoko...仏様; 本来Hotoke-samaと言うか(cio-cio-sanでは日本語のままsanを使っていますのでsamaもそのまま使って差し支えないでしょう)、伊語でLe statue di Buddaと言わなければならないところですが、情報不足のままあくまで日本語にこだわった結果、Hは伊語には用いられない文字という理由で省かれ、かつなぜかtが二つ付いた上、さらに日本語にはない複数の定冠詞Gli(英語のTheに相当する)が前に加わったため‘リオットケ’と言う訳の分からない日本語になってしまいました。せっかくの彼の思いもこれでは台無しでしょう。私共はこのような日本語の扱いに関しても、日本人の義務として、彼のせっかくの思いを生かすため熟慮した結果、‘リオットケ’の音楽的ニュアンスを活かした一番良い歌い方として今回は、‘mihotoke’御仏と歌います。仏様を、西洋の神のように呼び捨てにせず、心のこもった日本人らしい言い回しであり、ブッチーニがこのアイデアを知れば即座に取り入れたでしょう。他にもこういった例は幾つか残っています。‘楽器’の問題点が解決された後は、日本語に関係した言葉(歌詞)に関しても、ブッチーニの思いを成就させるため、また私たち日本文化のために、日本人皆で改良してそれを世界に広めていくことが、私達日本人に課せられた義務ではないでしょうか。

楽譜⑦

注釈

注1 今回のプロジェクトの一番の目玉です。(楽譜①参照) この百年間、世界中の公演でTamTam Grave‘低音で、重たく荘重な大きい銅鑼(全曲中ここにだけに指定されている)は、そのGraveが持つ意味合いや、この楽器の楽譜上に書かれてあるinterno(舞台の内部・背後から)の持つ大切な意味合い等が考慮されること無く、ブッチーニが指定していない普通のTamTam(銅鑼)を指定とは違う通常のオーケストラピット(舞台と客席との間のオーケストラが演奏するスペース)の中で派手な効果音として鳴らすことが慣習になっていました。Internoという指定は、オーケストラの中で使われる効果音としてではなく、舞台上あるいはその背後に現実に存在する向か音が音を発する場合にのみ使われる専門用語です。このことに前後の状況を加味すると、この音は、キリスト教への改宗に怒った、仏教を代表する袈裟をまとった僧侶の怒鳴り声に加勢して小高い丘の上にある二人の家の背景(長崎の町)から響いてくる深い響きの大きな鐘(TamTam Grave)の音」と言うことになります。この条件に合い現実社会に存在する大きな鐘と言えば寺の釣鐘(梵鐘)しかありません。ブッチーニは当然、レコードで聞いた本物の日本の寺の釣鐘(梵鐘)をここで使いたかたでしょう。しかしそれは大きすぎて持ち運び不可能であることを在伊の日本人から教えられ、その音に少しでも近い音色を持った楽器と考えあぐねた据え、代用としてTamTam Graveと指定するしかなかったのです。今回東京ニューシティ管弦楽団が特注するまで、古今東西を問わずクラシック音楽界では釣鐘の音に代る適当な楽器はありませんでした。ブッチーニに限らずこの音を欲する作曲家は、各々の持ち合わせている知識の中で一番イメージに近い楽器で代用するしかなかったのです。これに対しこの箇所ですべて誤って効果音として鳴らされてきた普通のTamTamは、この曲中で、他の箇所にも何度か使われ(舞台上ではなくオーケストラピットの中で)、その独特な音色が通常どおり効果音として活かされています。すなわち‘蝶々夫人’で指定されている、TamTam Graveと普通のTamTamとは、単に大きさの違いだけではなく、全く別の役割が与えられているという訳です。後に作曲された中国が舞台の歌劇「トゥーランドット」でも、中国の寺院の釣鐘の音(日本の釣鐘と同じ音色)が遠くから聞こえてくる場面にのみ鐘の音にTamTam Graveという言葉が用いられており、またヨーロッパの教会の大きな鐘の音には、これも抽象的にCampane(鐘) Graveと言う名が与えられています。言い換えれば、ブッチーニには、寺院の大きな鐘に対して、この言葉を用いる習慣があったということです。しかし残念ながら現実にはTamTam Graveをf(強音)で叩くと、どうしても中国の銅鑼のジャンと言う音色になってしまうことが避けられず、結果として彼の願いもむなしく日本の寺の鐘の音のイメージからはかけ離れた音色が響きわたってきたのです。そこでこの度東京ニューシティ管弦楽団は、ブッチーニの意図どおりの音を出し、世界に本当の日本の味わいを知ってもらうため、形は違いますが本物とほぼ同じ音色の手作りの日本の鐘を特注し、それを舞台奥から鳴らします。これによりブッチーニの想いも初めて成就されることでしょう。

注2 本文の根拠のもう一つは、楽譜のTamTam欄で判るように(楽譜②参照)、ここの一打だけが sulla scena(舞台上)と指定されているのに対し、その他の場面ではわざわざ in orchestra(オー

ケストラピット内)と念押しされて書かれ、通常の効果音の役割が与えられています。すなわちこの2種類のTamTamにも、ブッチーニによって注1と同様全く別種な意味合いが期待されているのです。しかし今までおそくすべての公演でこの指定は無視され、同じ単なる効果音としてしか扱われてきませんでした。その結果本文のごとく全く別種の盛り上げりに、聴衆も演奏家も涙し酔いしれてきたのです。この指定(sulla scena)は、楽譜①で指定されていたinternoと厳密に言えば多少意味が違いますが、よく同じ意味合いで使われることがあり、この場面でも‘家の背後から聞こえてくる’と言う意味以外あり得ません。そのうえ本文に示してある状況を考慮すると、ここでのTamTamは、この曲の総譜中にも幾つかある、楽器名の不備(ミス)の一つで、単にGraveの意味合いが抜けている、すなわちブッチーニは楽譜①と同様TamTam Graveの意味で、注1と同じく寺の鐘(梵鐘)をイメージして書いたとしか考えられないのです。もしそうでないとするならば、舞台上(sulla scena)から聞こえてくるTamTamの音という指定に説明が付きません。蝶々さんの部屋に中国の銅鑼のようなものが存在していてそれが突然鳴ったとはとても考えにくいのです。しかも彼はこのようにTamTam(中国の銅鑼)だけを曲の盛り上げのため派手に響かせるという手法を嫌い、彼の全作品を通じてどこにも見当りません。(中国が舞台の歌劇「トゥーランドット」の中でさえも)。その良い例として『蝶々夫人』の終幕の最後の音符が挙げられます。ここでは全楽器がfffで盛り上がり曲が終わるように作られていますが、TamTamもfffで叩かれると、他の楽器を圧して目立ってしまうことが考えられます。それを防ぐためにTamTamだけあえてf1個のみに指定するという徹底ぶりからも、派手なTamTamの音を避ける彼の慎重な扱い方が伺われます。(楽譜③参照)

注3 (楽譜④参照) チャイムは、全曲を通じて、キリスト教を暗示するこの箇所には使われていません。

単なる効果音として使われているわけではない証拠としてsulla scena(舞台の背景から)と指定され、しかも他の楽器がpで書かれてあるにもかかわらず、意味を持たすため、寺の鉦とこのチャイムだけがmfまたはfで書かれていることが挙げられます。舞台の背景から聞こえてくる教会の鐘の音とは、蝶々さんのモデルとされる人の住んでいたグラバー邸のふもとにある有名な教会の鐘の音が聞こえてくるというイメージなのでしょう。

注4 Campanelli giapponesiが鳴っている時に、Commissario Imperiale(このオペラの中では、結婚式を執り行うために役所から臨時に派遣された役人のこと)と、ゴローにより2人の簡易な結婚式が進められているため、この役人のことを神主と見立てて、神式の結婚式が行なわれている(大いにありうる事であったと思われ)とみなし、この楽器が神道で使われる何か音のする器具ではないかとの考えも一見成り立つように思われます。しかし、神道にはあまり響きのない鈴のようなものはあっても、音程が判明するほどの響きを持ったかねらしきものはなく、しかもそれに‘(lasciar vibrare) (楽譜⑥参照) (響きを残したままの意味)を一小節以上も続けて’というブッチーニの指定が加われば、もう神道で使われる器具の可能性は無いと言わざるを得ません。しかもこの指定は風鈴の特性を良くつかんでおり、今回の企画の正当性をさらに高める役を果たしています。



# プッチーニが愛し抜いた蝶々さん

プッチーニ(1858～1924)はヴェルディ(1813～1901)の跡を次いでイタリアオペラの大山脈を継いだ作曲家だが、全12作品中9作品が今も世界歌劇場を飾っている人気作家だ。声とドラマを知り尽くし、その美しい旋律と場面の構成は天下一品。しかも悲劇のヒロインが常に中心、また異国趣味も特徴の一つ。第6作にあたるこの「蝶々夫人」は舞台が日本、ヒロインは毅然たる日本女性の悲劇とあって、プッチーニにとっても、最も深い愛情が注がれている作品と言える。

原作は、アメリカ人ジョン・ルーサー・ロングの小説で、彼は宣教師の妻として長崎に住んでいた姉から話を聞き、この小説を書いて評判になった。それをデーヴィッド・ベラスコが原作者ロングの助力を得て戯曲に直して上演、各地でヒットした。そのロンドン公演を見て心を奪われたプッチーニは、すぐ楽屋にベラスコを訪ね、オペラ化を要請した。時まさに1900年、台本は「ラ・ボエーム」でコンビを組んだジャコーザとイリカ。しかも当時は日本への関心は、所謂ジャポニズムとして高く、フランス人口ティの小説「お菊さん」、北斎や歌麿への高い評価、吉原を描いたマスカーニのオペラ「イリス」なども生まれている。

とは言え、風俗も音楽も違う日本を描くのは容易ではなく、プッチーニは種々の人から知識を得る。なかでも当時イタリア公使夫人だった大山久子女子から

多くの資料を得、そのなかには日本音楽の楽譜やレコードもあったようだ。

こうして得た知識をプッチーニはオペラのなかに取り入れているが、音楽面で言うと「越後獅子」「君が代」「さくら」「お江戸日本橋」「宮さん」「かっぱれ」「豊年節」「推量節」「高い山から」などがある。勿論そのまま使ったのではなく、テンポを変えたり断片的にしたりして、すべてプッチーニの音楽のなかに消化されている。

更にプッチーニは日本の情緒を出す為に、日本の梵鐘、鈴、風鈴の音なども楽譜に書き入れているが、この指定は日本を知らない演奏家には明確に伝わらず、初演以来正しく再現されてはこなかった。それが今回初めて復元されて私たちの耳に届くわけで、改めて作曲家が描いた蝶々さんの悲劇が伝わってくるのではないか。

その悲劇、最後は確かに悲しい結末だが、短刀による自らの死は悲壮、残酷であると同時に、これは精神と肉体とが手を結んでの華麗な儀式で、彼女はこの死により、誰にも犯されない精神の勝利者となる。もともとオペラのヒロインに強い愛情を注ぐのが常だったプッチーニ、しかもこの当時、心ない悪妻の仕打ちに苦しんでいた彼にとって、女性の持つ真の愛情、そして死をもって名誉を守った蝶々さんは、まさに理想の女性であったに相違ない。

## 第1幕

プッチーニの特徴である短い前奏曲で幕が開く。舞台は長崎の山手にある家。これは海軍士官ピンカートンが蝶々さんと結婚する為に契約したもので、遠く長崎の港が見える。周旋屋のゴローが、部屋を自由に仕切れる障子や襖のことを説明し、更に結婚の契約も解消も自在だと得意顔。ピンカートンはアメリカ総領事シャープレス相手に『広い世界をヤンキーは、錨を下ろし快楽にふける』と軽薄に語り、シャープレスにたしなめられる。やがて遠くから女声合唱『美しい空、美しい海』が聞こえてくる。蝶々さんの登場だ。これもプッチーニの特徴で、男たちがまず開幕の雰囲気を作り、最高の場面でヒロインが登場するのが公式だが、仲間の女性たちに囲まれ、日傘をさした蝶々さんの登場は、なかでも最高の場面と言える。蝶々さんはピンカートンに挨拶し、『私は世界中で一番幸せ』と歌う。そしてシャープレスの問いに答えて、武士の娘だったが、父が死んだので芸者になった、まだ15歳と言うのでシャープレスは驚く。神主や親類の者たちが到着。蝶々さんは自分の持ち物をピンカートンに見せるが、そのなかに父が切腹した短刀がある。また小さな仏像を見せるが、それを捨てて『自分はキリスト教に改宗した』と伝える。「お江戸日本橋」の旋律によって結婚式が始まるが、突然寺の鐘の音とともに伯父ボンゾが現れ、彼女の改宗を怒り、親類たちもこれに和し、ののしりながら去っていく。やがて蝶々さんとピンカートンは『夕闇が訪れた』『愛らしい乙女よ』と、陶酔的な愛の二重唱に入るが、その会話のなかで蝶々さんは『貴方のお国では、蝶々をピンで刺すとか』と不安をもちます。

## 第2幕 第1場

3年の月日経った蝶々さんの家。ピンカートンはアメリカに渡ったまま。坊やが生まれているが、お金も乏しく侘しい暮らし。幕が開くと侍女のスズキが祈っているが、蝶々さんは『日本の神様ではだめ』とたしなめ、名アリア『ある晴れた日、港に船が入ってくる』と歌い始め、『彼は必ず帰ってくる』と絶唱する。シャープレス、ゴロー、

次いで蝶々さんを妻に迎えたいヤマドリ公爵も現れる。ピンカートンに『駒鳥が巣を作るころ日本に戻る』と言われていた蝶々さんはシャープレスに『アメリカでは駒鳥はいつ巣を作るのでしょうか』などと尋ねるが、彼はピンカートンからの手紙を読み始める。その内容は冷酷なものだが、蝶々さんにはうまく伝わらず、遂に手紙を読むのを止めてしまう。『もし彼が帰ってこなかったら』と言う言葉に、ティンパニーを含めたオケが彼女の衝撃を示して響く。蝶々さんは可愛い坊やをシャープレスに示し、『母さんはお前を抱いて、生きていくために歌ったり踊ったりしなくてはならない。そんなことなら死んだ方がまし』と泣き、シャープレスも衝撃を受ける。

突然、ピンカートンの乗った船の入港を知らせる大砲の音。『私の信じたとおり』と歓喜にむせぶ蝶々さんは、スズキとともに『花の二重唱』を歌い、部屋に花を撒く。このソプラノとメゾの女声二重唱は、この分野での屈指の名曲。そして思い出の花嫁衣裳に着替えた蝶々さんは、夜を徹してピンカートンを待つ。坊やとスズキが寝込んだあとも、彼女は障子の前に立ち尽くす。弦のピッツィカートに乗せたハミングコーラスが聞こえる。

## 第2幕 第2場

越後獅子の旋律による不吉な間奏曲。前の舞台のまま、夜明け。遠く水夫たちの掛け声。

不意に現れたピンカートン、シャープレスに驚くスズキ。しかもピンカートンの妻ケートの姿も。シャープレスはスズキに、『子供を渡してくれるよう、力を貸して欲しい』と頼み、スズキは『ひどすぎる』と泣き、ピンカートンは後悔し、三者三様の三重唱になる。そしてピンカートンは、『さらば愛の家よ』を歌い、逃げるように去っていく。蝶々さんが現れ、ケートの姿にすべての事情を知る。そして30分したら子供を渡すと告げ、父の切腹した短刀を取り上げ、『恥に生きるよりも名誉の為に死ぬ』と銘を読み上げ死に向かう。そのとき坊やが駆け込んでくる。蝶々さんは子供を抱き『可愛い坊や』と歌い、別れを告げ遠ざけたのち、毅然として自らの刃に伏す。遠く蝶々さんを呼ぶピンカートンの声。

MADAMA  
BUTTERFLY



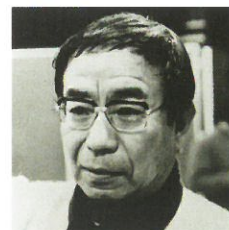


# Profile



内藤 彰 (指揮)  
*Akira Naito*

名古屋大学理学部卒業。在学中より指揮を山田一雄氏に師事する。桐朋学園大学研究科(指揮専攻)にて、小澤征爾氏、秋山和慶氏、尾高忠明氏他に師事し、修了後(社)山形交響楽団の専属指揮者を3年間務める。これまでに新日フィル、東フィル、東響、新星日響、シティ・フィル、神奈フィル、名フィル、九響他、日本の多くの主要オーケストラを指揮してきた。シンフォニーはもちろん、オペラ・バレエの分野でも、その音楽性とテクニックは聴衆の心からの共感と、共演者の絶大な信頼を得ている。海外では、91年旧ユーゴスラヴィアを代表する国立ベオグラードフィルハーモニーを指揮し好評を博した。また、92年には、モスクワ音楽院大ホールにて、モスクワ交響楽団を指揮し、最初のステージから満員の聴衆より5度のカーテンコールを受け、多くの楽員たちからもロシア音楽の魂を日本人から教えられたと絶賛された。96年5月には、ロシアの国立ヴァローニッシュ歌劇場にて、『セヴィリアの理髪師』を、97年5月には、ベラルーシ国立歌劇場にて『蝶々夫人』を指揮し、その成功により、同歌劇場から定期的な客演が要請されている。また01年3月のサンクトペテルブルグ・カペラ交響楽団客演の成果により同年秋ロシア国立ウリヤノフスク・アカデミー交響楽団首席客演指揮者に就任を要請され、その時の演奏会の模様は新聞各紙に大きく取り上げられ、絶大な賛辞が送られた。01年12月には北ハンガリー交響楽団を、02年7月にはミラノ・スカラ座フィルハーモニーのメンバーを中心とする州立ロンバルディア室内管弦楽団の北イタリアツアーを、03年3月にはメキシコ州立交響楽団を指揮、いずれも絶賛を博す。現在、東京ニューシティ管弦楽団、及びプロ混合合唱団「東京合唱協会」音楽監督・常任指揮者、日本指揮者協会幹事。



栗山 昌良 (演出)  
*Masayoshi Kuriyama*

東京生まれ。俳優座演劇研究所所員として講師を務めつつ、近代リアリズムの演出手法及び俳優術を研究し、後に文化庁派遣による芸術家在外研修員として欧米各地の舞台芸術を研修。オペラ演出家としてのデビューは、54年二期会『アマールと夜の訪問者』。以来、日本を代表するオペラ演出家として第一線で活躍し、ヴェルディ、プッチーニ、ビゼー、モーツァルト、ロッシーニ、フンパーディンク等の名作オペラを日本に定着させただけでなく、『卒塔婆小町』『夕鶴』『祝い歌が流れる夜に』『黒船』『袈裟と盛遠』『金閣寺』といった日本オペラの上演においても多大な貢献を成し得た。特に関西二期会・泉鏡花原作『天守物語』では、幻想的な様式美を見事に具現化、会場は熱狂の嵐に包まれた。さらに地の台詞を伴うオペレッタの分野では、二期会の18番ともいえる『メリー・ウイダー』『こうもり』等の訳詞上演でも素晴らしい功績を残している。また、三大オペラチクルス『蝶々夫人』では舞台美術も担当。02年10月新橋演舞場・大地真央主演『椿姫』、11月二期会『椿姫』も手堅い演出で評価を高めた。他に、演劇の演出も数多く、その活躍の幅は広い。72年芸術選奨文部大臣賞、82年ジロー・オペラ賞、83年ジロー・オペラ賞を受賞。87年にはオペラ演出家としての功績により紫綬褒章等を受賞。我が国のオペラ演出のアカデミズムを確立する演出家として、益々の信望を集めて活躍している。国立音楽大学名誉教授。



松本 美和子 [ソプラノ] ●蝶々夫人  
*Miwako Matsumoto*

武蔵野音楽大学卒業。同専攻科修了。ローマ・サンタチェチリア音楽院を首席で卒業。日伊声楽コンクール特別賞受賞、毎日音楽コンクール(現日本)第一位、ジュネーブ、トゥールーズ、バルセロナ等の国際コンクール入賞。72年ローマ国立歌劇場で『カルメン』のミカエラでデビュー以降、ウィーン国立歌劇場、ロンドンのロイヤルオペラの他、ミュンヘン、ベルリン、シカゴ、バルセロナ、南米、イタリア国内各地の主要オペラ劇場に出演。共演した歌手たちもアルフレッド・クラウス、ホセ・カレーラス、ニコライ・ギャウロフ、ヘルマン・ブライ、ルッジェーロ・ライモンディ、ホセ・ファンダム、ホアン・ボンズ等に及ぶ。またウィーン楽友協会にて日本人として初めての楽友協会主催による歌曲のタペリサイタルに出演。トスティ生誕150周年記念コンサートで100曲を歌いあげ、また全100曲のCD録音を行い「極めて芸術性の高い音楽」と絶賛されている。また98-99年はレスピーギ生誕120周年にあたり、日本で初めて全曲レスピーギのCDをビクターで録音、その他イタリア古典、オペラアリア、イタリア近代歌曲、日本歌曲など約20枚のCDをリリースしている。新国立劇場98-99年シーズン幕開けで蝶々夫人を歌い、新聞各紙で絶賛を博した。その後『夕鶴』『こうもり』ソフィア国立歌劇場『ラ・ボエーム』等々出演03年6月にはA・プレヴィン作曲『欲望という名の電車』(東京室内歌劇場主催)に主演、好評を博した。また自身の音楽活動の他にも次世代の育成をライフワークとして取り組んでおり98年チャイコフスキー・コンクールで優勝した佐藤美枝子をはじめとする数々の優秀な新人を世の中に送り出している。86年ジロー・オペラ大賞、98年モビル音楽賞、イタリアにおいてはユニセフ音楽等数々の賞を受賞している。





**小林 一男 [テノール] ●ピンカートン *Kazuo Kobayashi***

73年国立音楽大学卒業。日伊コンコロソでミラノ大賞受賞、イタリア政府給費留学生としてイタリア・ミラノのヴェルディ音楽院留学。74年ミラノのピッコラ・スカラ座ドニゼッティ『リタ』にてデビュー。同年レジオ・エミーリア国際声楽コンクールで特別賞受賞。75年より西ドイツのオーデンブルグ国立劇場と専属契約、プッチーニ『外套』『ジャンニ・スキッキ』などに出演。77年帰国後、日生劇場にて『蝶々夫人』ピンカートン役で日本デビュー。83年第11回ジロー・オペラ賞受賞。89年オーチャードホール・オープニングオペラ『魔笛』タミーノ役、日生オペラ『蝶々夫人』ピンカートン役などで好評を博す。91年日生劇場『モーツァルト没後200年大オペラ公演』、93年三枝成彰『千の記憶の物語』、94年モーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』、團伊玖磨『素戔鳴(すさのお)』初演に出演。交響曲、オラトリオ、ミサ曲のソリストとしても各オーケストラから常に招かれ、96年NHK交響楽団より永年の演奏活動に対し「有馬賞」授与。97年三枝成彰『忠臣蔵』世界初演、新国立劇場柿落とし團伊久磨『タケル』などに出演、円熟した歌唱、演技を披露。近年楽しいおしゃべりとともに贈るリサイタルも、その澄み切った厚みのある声質の良さと叙情的な表現力をもって多大な人気と名声を博している。



**勝部 太 [バリトン] ●シャープレス *Futuru Katsube***

福岡教育大学英語科卒業。東京芸術大学大学院声楽科修了。文化庁オペラ研修所修了。79年文化庁派遣芸術家在外研修員として、ミュンヘンに留学。第45回日本音楽コンクール第1位。第7回、第19回ジロー・オペラ賞受賞。91年第1回出光音楽賞受賞。中山悌一氏、疋田生次郎氏に師事。76年労音主催公演『カルメン』のエスカミーリョでデビュー。翌年の二期会公演『蝶々夫人』シャープレスで一躍注目を浴び、『ドン・ジョヴァンニ』のタイトルロールを見事に演じて絶賛される。その後はワーグナー、モーツァルトのオペラをはじめとして、團伊玖磨『素戔鳴』(世界初演)のタイトルロール等数多くのオペラに出演。97年5月には話題の大作オペラ三枝成彰『忠臣蔵』に出演後、10月には新国立劇場開場記念公演『建・TAKERU』でも重要な役を務め、続いて二期会公演『フィガロの結婚』でアルマヴィーヴァ伯爵、98年は長野オリンピック記念オペラ『善光寺物語』タイトルロール、99年仙台オペラ『遠い帆』(三善晃)支倉常長役。02年1月には二期会・新国立劇場『忠臣蔵』に再び出演。同年10月北京市において日中国交正常化30周年記念公演オペラ『ちゃんちぎ』(團伊玖磨)の狐のおとっさま、03年6月『欲望という名の電車』(日本初演)のスタンリー・コワルスキー、同じく11月アルバン・ベルク『ルル』(日本初演)に出演し、いずれも好評を博した。二期会会員。



**郡 愛子 [メゾソプラノ] ●スズキ *Aiko Kori***

85年(第13回)、86年(第14回)ジロー・オペラ賞を2年連続受賞。さらに87年には、リサイタル「オルフェオの世界」で昭和62年度文化庁芸術祭賞を受賞。75年に日本オペラ協会より、78年に藤原歌劇団より、それぞれオペラデビューし、以来、同協会や同団における公演はもとより、小澤征爾指揮「ヘネシー・オペラ・シリーズ」ほか、数多くのオペラ公演に出演。新国立劇場主催公演においても、98年以降、『蝶々夫人』、『エウゲニ・オネーギン』、『ヘンゼルとグレーテル』、『セビリアの理髪師』などのオペラで、出演を重ねてきている。コンサートにおいても、ホルスト・シュタイン指揮によるNHK交響楽団定期演奏会をはじめ、国内主要オーケストラの定期演奏会や特別演奏会に出演を重ね、幅広い演目で活躍を続けている。独特の奥深い芳醇な声を持ち、内面的な表現に秀でた日本を代表するメゾソプラノである。02年6月には、横浜アリーナで開催された「3大テノール・ラスト・コンサート」にゲスト出演し、話題を呼んだ。また04年4月～5月に主要都市ツアーが予定されている、バーンスタイン作『キャンディード』にも、“オールドレディ”役で出演する。都内主要ホールでリサイタルを毎年開催するほか、全国各地でソロ・コンサート活動を展開しており、独自のコンサート・スタイルを着々と築いてきている。CDアルバムは、ビクターエンタテインメントより発売されている。藤原歌劇団団員、日本オペラ協会会員。



**松永 国和 [テノール] ●ゴロー *Kunikazu Matsunaga***

尚美高等音楽学院教育科及び研究科卒業。二期会オペラスタジオ修了。古沢泉、宮原卓也の両氏に師事。二期会・ゾリスデン主催オペラ『ナクソス島のアリアドネ』のスカラムーチョでデビュー。以後、沖縄復帰10周年記念公演・歌劇『沖縄物語』小祿役等を皮切りに、最近ではテノール・リリコの役どころを広げてきた。2000年幕開けの第43回NHKニューイヤーオペラコンサートに出演、ベートーヴェン作曲オペラ『フィデリオ』のフロレスタン役を歌い好評を得た。その後『魔笛』『くさびら』『ホフマン物語』『忠臣蔵』『七つの大罪/怖がらないで』『ニルンベルクのマイスタージンガー』『ばらの騎士』『蝶々夫人』に出演。また、ベートーヴェンの『第九』のソロや宗教音楽(レクイエム・ミサ曲等)のソロも年数回歌うなど活動の広がり目覚しく、新世紀を迎えて更なる活躍が期待されている。二期会会員。



**宮本 哲朗 [バリトン] ●ヤマドリ *Tetsuro Miyamoto***

国立音楽大学声楽科卒業。同オペラ研究科修了。オペラ『魔笛』のパパゲノ役でデビュー。二期会、東京室内歌劇場等の公演で古典から現代まで様々なジャンルのオペラに出演、数多くのレパートリーをこなしている。日本歌曲の分野でも目覚ましい活動をしており、新作の初演なども多く手懸けている。94年、2000年と音楽之友ホールにて日本歌曲における「語り物」を集めたリサイタルを行い、各音楽誌で高評を得た。また一方、オペラの演出も数多く手懸け、特に地方でのオペラ活動に力を注ぎ、その育成に尽力している。



**渡邊 史 [ソプラノ] ●ケイト *Aya Watanabe***

東京芸術大学卒業。同大学院修了。ミレニウム・ニュークラシックオーデション声楽部門第1位。審査員特別賞、オペラアリア賞受賞。日本クラシック音楽コンクール第2位。ザルツブルクモーツァルト音楽院夏季アカデミーディプロマ取得。同アカデミーの推薦により、市内ミラベル宮殿で行われたコンサートに出演。多くのオペラ、オペレッタで主役を務め、オラトリオのソリストとしても活躍している。二期会会員。



**東京ニューシティ管弦楽団 *Tokyo New City Orchestra***

東京ニューシティ管弦楽団は、90年、音楽監督・常任指揮者に内藤彰を擁し設立された。定期演奏会のほか、名曲コンサート、協奏曲・オペラ・バレエの伴奏、レコーディングなど幅広く活躍。特に、オペラの分野では評価が高く、二期会、藤原歌劇団の他、レナータ・スコット、アルフレード・クラウス、ヘルマン・ブライ、カーティア・リッチャレリ、マリエッラ・デヴィーア、マリア・キアラ、渡辺葉子、カルロ・ベルゴンツィ、アグネス・バルツァ等世界で活躍するオペラ歌手との共演も数多く、聴衆や批評家のみならず、世界の著名オーケストラと共演している彼らからも、絶賛の言葉を贈られた。バレエでは、国内のバレエ団の他、英国バーミンガムロイヤルバレエ団、ミラノ・スカラ座バレエ団、シュトゥットガルトバレエ団、ロシア国立レニングラードバレエ団等海外からのバレエ団の日本公演でも大変高い評価を得ており、今後も内外のバレエ団の公演が目白押しである。また、桂三枝、三枝成彰、中島啓江、ケント・ギルバート、マリ・クリスティーン等を迎えてのファミリーコンサートも、大変評判がよく、多くの方から親しまれている。メンバー個人個人の實力はもちろん、それぞれの温かい人間性も共演の指揮者、ソリストから大変高く評価されており、また、一切の無駄を省いた新しいオーケストラの運営方針もユニークな発展を見せ、近年その活動が各方面から注目されている。2000年度より定期演奏会を年間5回に増やし、東京第9番目のオーケストラとして今後の活躍が益々期待されている。



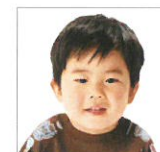
**菅野 宏昭 [バス] ●僧侶 *Hiroaki Kanno***

東京芸術大学声楽科卒業。在学中より数多くのオペラやコンサートに出演する。88年よりイタリア・ミラノに留学し、イタリア各地でロッシェニ『スターバト・マーテル』『小荘厳ミサ』、ストラデルラ『クリスマス・カンタータ』のバスソロ他、さまざまな演奏会に出演し好評を博す。帰国後、駒場エミナスでリサイタルを開催したのを始め、NHK・FM「土曜リサイタル」「題名のない音楽会」、留学前にはNHK教育テレビ「第九をうたおう」でボイストレーナーとしても出演。続いて二期会オペラ『魔笛』、『ジャンニ・スキッキ』、都響/若杉弘指揮『ニルンベルクのマイスタージンガー』、長野オリンピック記念オペラ『善光寺物語』『ドン・カルロ』フィリッポ2世、『ラ・ボエーム』コッリーネ、『トゥーランドット』ティムール、『マクベス』バンクォー、『さまよえるオランダ人』ダーランド、『タンホイザー』領主ヘルマンに出演する等、幅広い活動を展開している。二期会会員、東京音楽大学講師。



**安藤 常光 [バリトン] ●神官 *Joko Ando***

東京芸術大学声楽科卒業。桐朋学園大学研究科修了。二期会オペラスタジオ第39期修了、終了時に優秀賞受賞。文化庁オペラ研修所第11期修了。平成10年度文化庁派遣在外研修員としてドイツに留学。第3回多摩フレッシュ音楽コンクール声楽部門第1位。第69回日本音楽コンクール声楽部門第2位。02年ドイツにてラインスベルク国際音楽祭に唯一の日本人ソリストとして出演。国内において二期会公演、小澤征爾音楽塾オペラ公演、各種コンサートに出演。二期会会員。



**畠山 紫音 ●子供役 *Sion Hatakeyama***

生年月日 平成10年 11月 14日 5歳  
芸歴 オペラ『蝶々夫人』  
映画 「せかいのおわり」



東京ニューシティ管弦楽団

音楽監督・常任指揮者 内藤 彰  
 マネージング・ディレクター 渡部 中子  
 プロデューサー 小坂井 司  
 コンサートマスター 藤田 めぐみ  
 インспекター 金岡 秀典 / 山川 奈緒子  
 ライブラリアン 古市 尚子  
 事務局 渡辺 晶子 / 鈴木 光子 / 渋谷 明子 / 松本 敬子  
 今井 久美子 / 廣田 香 / 青木 勝弘

1st Violins	栗原 りか	望月 直哉	Clarinet	Trombones
◎藤田 めぐみ	迫田 信子	富成 倫子	西尾 郁子	伊藤 吉隆
富山 ゆりえ	樋口 美佐子	仙石 由紀子	松元 香	鹿野 鉄郎
中村 朱見	萩野 恵美子	Double Basses	原山 佐保子	Bass Trombone
鈴木 順子	小林 冴子	○若林 昭	Bassoons	恵藤 康充
吉井 孝子	Violas	石川 仁	藤田 旬	Contra Trombone
中澤 真理子	○桜井 多美子	青山 幸成	齋藤 美和子	野口 貴洋
遠藤 雄一	竹鼻 江美子	谷中 隆	Horns	Timpani
小澤 郁子	宇佐美 久恵	Harp	小川 正毅	藤城 佳之
上田 博司	高瀬 有美	平島 さより	松浦 光男	Percussion
山川 奈緒子	久郷 寿実子	Flutes	小笠原 一弘	堀尾 尚男
綱木 郁	土屋 知樹	岩佐 和弘	藤原 奈津子	石澤 学
室井 美子	尾台 和佳	井ノ上 洋	Trumpets	尾花 章子
2nd Violins	Violoncellos	内山 豊美	中西 清一	大河原 涉
○上原 まさみ	○齋藤 章一	Oboes	小林 史尚	Stage manager
山江 洋子	橋本 しのぶ	徳田 振作	古田 賢司	青木 勝弘
福田 貴子	大島 純	井上 恵子		金岡 秀典
荒巻 泉	松 穰	池田 祐子		

東京ニューシティ管弦楽団2004年度定期演奏会 音楽監督・常任指揮者 内藤 彰

- 第35回定期演奏会(ベートーヴェン新版シリーズIV) 4月24日(土) 18:30~ 東京芸術劇場(大)  
指揮 内藤 彰 ヴァイオリン 瀬川 祥子  
ベートーヴェン:序曲「献堂式」(ヘンレ新版)  
:ヴァイオリン協奏曲(ヘンレ新版)  
:交響曲第5番「運命」(ブライトコップ新版)
- 第36回定期演奏会(ベートーヴェン新版シリーズV) 7月14日(水) 19:00~ 東京芸術劇場(大)  
指揮 本名 徹次  
ピアノ アンドレ・ピサレフ(ラフマニノフコンクール優勝)  
(モーツァルトコンクール優勝)  
ベートーヴェン:「レオノーレ」序曲第2番  
ピアノ協奏曲第2番  
交響曲第8番(ブライトコップ新版)
- 第37回定期演奏会(新発見ブルックナー自身による改訂版/アダージョ楽章世界初演) 9月4日(土) 18:30~ 東京芸術劇場(大)  
指揮 内藤 彰  
ブルックナー:交響曲第8番 他
- 第38回定期演奏会(ベートーヴェン新版シリーズVI) 12月3日(金) 19:00~ すみだトリフォニーホール(大) <予定>  
指揮 アグネス・グロスマン  
ピアノ リチャード・レイモンド  
ヴァイオリン アンヌ・ロペール  
チェロ ベノワ・ロワゼール  
ベートーヴェン:「フィデリオ」序曲  
:三重協奏曲  
:交響曲第7番(ブライトコップ新版)

■お問い合わせ・お申し込み:東京ニューシティ管弦楽団事務局  
 〒178-0063 東京都練馬区東大泉3-22-15-2F Tel:03-5933-3222 Fax:03-6766-3782 <http://www2.plala.or.jp/newcity/>  
 ●団体割引・セット券割引については事務局にお問い合わせください。●やむを得ぬ事情により、出演者、曲目等が変更になる場合がございます。何卒ご了承ください。



創造的なソリューションを  
 ご提案します

- オフセット印刷
- オンデマンド印刷・デジタルカラー出力
- ポスター・パンフレット等のDTPデザイン制作
- ホームページ・CD-ROM等のデジタルコンテンツ制作
- 放送台本・名刺・チケット・ハガキ等の各種印刷および製本人材派遣業務
- 演奏用楽譜の写譜・浄書
- NHK放送記念品等物品販売

情報社会の多様化するニーズに先端の印刷・情報処理技術でトータルに対応。確かな品質でIT時代にふさわしいドキュメントサービスをご提供できるよう、努力しつづけています。

株式会社 **NHKプリンテックス**

〒150-0047 東京都渋谷区神山町1-2 第八共同ビル  
 TEL 03-3460-3563 (代) FAX 03-3460-3891